

半七捕物帳

二人女房

岡本綺堂

青空文庫

一

四月なかばの土曜日の宵である。

「どうです。あしたのお天気は……」と、半七老人は訊きいた。

「ちつと曇っているようです」と、わたしは答えた。

「花どきはとも困ります」と、老人は眉をよせた。「それでもあなた方はお花見にお出かけでしょう」

「降りさえしなければ出かけようかと思つています」

「どちらへ……」

「小金井です」

「はあ、小金井……。汽車はずいぶん込むそうですね」

「殊にあしたは日曜ですから、思いやられます」

「それでも当節は汽車の便利があるから、楽に日帰りが出来ます。むかしは新宿から淀橋、中野、高円寺、馬橋、荻窪、遅野井、ぼくや横町、石橋、吉祥寺、関前……これが江戸か

ら小金井へゆく近道ということになっていましたが、歩いてみるとなかなか遠い。ここで一日ゆつくりお花見をすると、どうしても一泊しなければならぬ。小金井橋のあたりに二、三軒の料理屋があつて、それが旅籠はたごを兼業ですから、大抵はそこに泊めてもらうことになるのですが、料理屋といつても田舎茶屋で、江戸から行った者にはずいぶん難儀でした」

「あなたもお出でになつた事があるんですね」

「ありますよ」と、老人は笑つた。「小金井の桜のいいことは、かねて聞いていましたが、今も申す通り、なにぶん道中が長いので、つい出おくれましたが、忘れもしない嘉永二年、浅草の源空寺で幡随院長兵衛の三百回忌の法事があつた年でした。長兵衛の法事は四月の十三日でしたが、この三月の十九日に自分の幸次郎と善八をつれて、初めて小金井へ遠出とゐでを試みたと言ふ訳です。武家ならば陣笠でもかぶつて、馬上の遠乗りというところですが、われわれ町人はそうは行かない。脚絆きやはんをはいて、草履はを穿いて、こんにちでいう遠足のこしらえで、三人は早朝から山の手へのぼつて、新宿、淀橋、中野と道順をおつて徒かちあるきです。旧暦の三月ですから、日中は少し暖か過ぎる位でした。今から思うと、むかしの人間は万事が悠長だつたのですね。途中の茶店などに幾たびか休んで、のん気に

又ぶらぶら歩いて行く。それを保養と心得ていたのですよ。はははははは」

「しかしそれが本当の保養でしょう。今日のように、汽車に乗るにも気違いのような騒ぎじゃあ、遊びに行くのか、苦しみに行くのか判りません。どう考えても、ほんとうの花見は昔のことでしょうね。そこで、その時には別に変ったお話ありませんでしたか」

「ありましたよ」と、老人は又笑った。「犬もあるけば棒にあたると云いますが、わたくし共があるくと不思議に何かにぶつかるのですね。その時も小金井までは道中無事、小金井橋の近所で午飯ひるめしを食ってそこの花をゆつくり見物して、ここでお泊まりにしてしまえば、まあ無事だったわけですが、どうせ泊まるなら府中の宿しゆくまで伸のそうと云うことになって、いずれも足の達者な奴らが揃っているので、畑のあいだの道を縫ぬって甲州街道へ出て、小金井からおよそ一里半、府中の宿へ行き着いて、宿の中ほどの柏屋という宿屋にはいりましたが、まだ日が高いので、六所明神ろくしよへ参詣さんぎということになりました。闇祭りやみまつりで有名な六所明神、ここへ来た以上は、一度参詣をしなければならぬというわけです。あなたはお参りをなすつた事がありますか」

「いいえ、小金井には学校時代に一度遠足に行った事があるだけで、府中は知りません」
「それでは少し説明をして置かなければならない。と云うのは、社やしろの入口から隨身門まで

およそ一丁半、路の左右は松と杉の森で、四抱えも五抱えもあるような大木が天を凌いで生い茂っています。その森の梢にはたくさんの鷺や鶉が棲んでいるが、寒三十日のあいだは皆んな何処へか立ち去って、寒が明けると又帰って来る。それが年々一日も違わないので、ここでは七不思議の一つと云われています。そこで、その鷺や鶉は品川の海や多摩川のあたりまで飛んで行って、いろいろの魚をくわえて来るが、時にはあやまって其の魚を木の上から落とすことがある。土地の女子供はそれを見つけて拾って来る。ここらは海の遠い所ですが、鳥のおかげで、案外に海魚の新らしいのを拾うことが出来ると云うのは、何が仕合わせになるか判りません。早く云えば天から魚が降って来るようなわけで……」

「おもしろい話ですね。今でもそうでしょうか」

「さあ、今はどうだか知りませんが、昔はそうでした。現にわたくしも見たのだから嘘じやありません」と、老人はつづけて笑った。「その時にも魚が降って来ましたよ。わたくしと幸次郎と善八、この三人が宿屋を出て、六所明神の社をさして行きかかると、今も申す通り、隨身門までは右も左も松杉の大きい森、その森を横に見ながら辿って行くと、幸次郎がだしぬけにあつと云う。何かと思つてその指さす方角を見ると、一羽の大きい白鷺が大空から舞いさがつて、森のこずえに降りようとする途端に、どうしたはずみか、銜え

ている黒い魚を振り落としたので、魚は天から降って来たという形。……すると、そこらに遊んでいた二人の子供がわつと云つて駆けて行く。ひとりは赤ん坊を負っている十四、五の女の児、ひとりは十一、二の男の児で、どつちも慌ててその魚を拾おうとする。こうなつちやあ鷺も降りて来ることは出来ない。人間同士の取りっこです。

年上だけに女の児が素早く拾つたのを、男の児がまた取ろうとする。女の児はやるまいとする。両方が泣き顔になつて一生懸命です。しよせんは子供同士の獲物争い、笑つて見て通ればそれ迄ですが、ただ見過ごせないのが私の性分で、怪我でもするといけなから留めてやれと幸次郎に云いますと、幸次郎は駆けて行つて二人を引き分けました。いくら相手が子供でも、留男とめおとしに出た以上は唯は済みません。女の児が先に拾つたのだから、魚は女の児にやらなけりやいけな。その代りにお前にはこれをやると云つて、幸次郎が三文か四文の銭ぜにを渡すと、男の児は大よろこびで承知しました。

しかし、この子供たちはふだんから仲が悪いのか、それとも魚を取られたのが口惜くやしいのか、男の児は相手の女の児を指さして、こいつの家うちへはお化けが出るんだよ。やあお化けだ、お化けだと呶鳴りながら、一目散に逃げて行きました。すると、こつちの女の児は手に掴つかんでいる魚を抛り出して、わあつと泣き出しました。何が何だか判らないが、いつ

までも子供を相手にしてもいられないので、三人はそのまま其処を立ち去って、隨身門をはいって御社おやしらに参詣、もとの宿屋へ帰って来ました。

唯これだけならば別にお話の種にもならないのですが、その晩は宿屋も閑ひまだったと見え、女中ふたりが座敷へ来て酒の酌をする。そのときに例の魚の降って来た話が出ると、女中はその女の児を知っていました。男の児は誰だか判らないが、女の児はお三ちゃんに違いないと云うのです。お三の父親の友蔵は、四年ほど前までは布田ふだの宿しゆくで多摩川の漁師をしていました。布田は府中よりも一里二十三丁の手前で、こんにちでは調布ちようふという方が一般に知られているようです。なにしろ府中と布田とは直ぐ近所で、土地の者は毎日往来していると云うことでした。

友蔵はどうも質たちの良くない人間で、博奕を打つ、喧嘩をする。そのほかにも何か悪いことをしたので、土地の漁師仲間からも追いのけられて、今では府中の宿へ流れ込んで、これという商売も無しにぶらぶらしている。女房には先年死に別れて、お国とお三という二人の娘がある。そんな奴だから年頃の娘を唯は置かない。姉のお国は調布の女郎屋へ売ってしまい、妹のお三は府中の喜多屋という穀屋こくやへ子守奉公に出しているのだそうです。「その喜多屋へお化けが出るんですか」と、わたしは話の腰を折るように訊いた。

「いや、喜多屋に係り合いはないのですが、友蔵の家うちに出るといふ噂があるのです」
 「なにが出るんですね」

「友蔵は宿のはずれに、小さな世帯を持つているが、家うちを明けつ放して毎日遊びあるいて
 いる。そこへ女と男の幽霊がでるといふ噂で……。女は調布の女郎屋に売られた娘のお国、
 男は江戸の若い男だといふのです」

「二人は心中でもしたんですか」

「そうです。二人が心中をして、その幽霊が友蔵の家へ現われる。夜は勿論、雨のふる暗
 い日などには昼間でも出ると云うのだから恐ろしい。しかし友蔵は平気でいるところをみ
 ると、本当に出るのか出ないのか、それとも友蔵の度胸がいいのか、そこは好く判らない
 が、ともかくも其の家にお化けが出ると云うのは宿しゆくじゆうの評判で、誰でも知らない者は
 ないと、宿屋の女中たちはまじめになつて話しました」

「化けて出ると云うからには、その男と娘が何か友蔵を恨む訳があるんですね」

「恨むというのは……。まあ、こういう訳です」

おとしの五月、六所明神の闇祭りを見物に來た江戸の二人連れがあつた。それは四谷の和泉屋という呉服屋の息子清七せいしちと、その手代の幾次郎で、この柏屋に泊まつたのであるが、祭りは殆ど夜明かして朝まで碌々眠られなかつたので、夜が明けてから寢床にはいつて午過ぎひる過ぎに起きた。これでは明るいうちに江戸へはいれまいと云うので、八ツ（午後二時）過ぎにここを出て、二人は調布に泊まることになつた。いずれも二十二、三の若い同士であるので、唯の宿屋には泊まらないで、甲州屋という女郎屋にはいり込んだ。

ここは友蔵の娘が奉公している店で、そのお国が清七の相方あいかたに出た。お浅という女が幾次郎に買われた。お国はそのとき二十歳はたちで、この店の売れっ妓こであつたが、見すみす一夜泊まりと判つている江戸の若い客を特別に取り扱つたらしく、その明くる朝は互いに名残りを惜しんで別れた。

江戸には遊び場所もたくさんある。殊に眼のさきには、新宿をも控えていながら、清七はお国のことを忘れ兼ねて、店の方をどう云い拵えたか知らないが、その後もふた月に一度ぐらゐは甲州屋へ通かよつて來た。その当時の甲州街道でいえば、新宿から下高井戸まで二里三丁、上高井戸まで十一丁、調布まで一里二十四丁、あわせて四里の道を通つて來るの

であるから、相手のお国はいよいよ嬉しく感じたらしい。こうして一年あまりを過ごしたが、何分にも江戸の四谷と甲州街道の調布ではその通い路が隔たり過ぎていたので、二人のあいだに身請けの相談が始まった。

こうなると親にも打ち明けなければならぬので、お国は父の友蔵を呼んで相談すると、友蔵はよろこんで承知した。しかし江戸の客が身請けをするなぞと云えば、主人も足もとを見て高いことを云うに相違ないから、おれが直じき々に掛かけ合あつて、親許身請けと云うことにして、十五両か二十両に値切つてやる。ともかくもその清七という男に二十両ばかりの金を持たせて来いと教えた。

その教えに従つて、清七は二十五両ほどの金を持って、府中の友蔵をたずねて行くと、友蔵はおとなしい清七をだまして、その金をまき上げてしまった。そうして、十五両や二十両の端はした下がね金ねで大事の娘をおめえ達に渡されるものか、娘がほしければ別に百両の養育料を持つて来いとそらうそぶいた。それでは約束が違つたと争つたが、清七は友蔵の敵でない。果てはさんざんに撲なぐられて表へ突き出された。

くやし涙に暮れながら甲州屋へもどつた清七は、お国とどういふ相談を遂げたのか知らないが、その夜のうちに甲州屋をぬけ出して多摩川の河原に出た。水が浅いので死ねない

と思つたのであろう。お国が持ち出した剃刀^{かみそり}で、男は女の喉^{のど}を突いた。さらには死に切れなかつたらしく、血みどろの二人は抱き合つたまま、浅瀬にすべり込んで倒れているのを、明くる朝になつて発見された。別に書置らしい物は残されていなかったが、二人が合意の心中であることは疑うまでもなかつた。

それは去年の八月、河原の蘆^{あし}の花が白らんだ頃の出来ごとで、若い男女をむごたらしい死の淵^{ふち}に追いやつたのは、友蔵の悪法に因ることが自然に世間にも知れ渡つたが、相手が悪いので甲州屋でも表向きの掛け合いをしなかつた。それをいいことにして、友蔵は平気で遊び暮らしていたが、その以来、さなきだに評判の悪い友蔵はいよいよ土地の憎まれ者になつた。お国と清七の幽霊が恨みを云いに出るといふ噂も立てられた。友蔵は昼間こそ平気な顔をしているが、夜は血だらけの幽霊ふたりに責められて、唸つて苦しむなどと誠しやかに云い触らす者もあつた。

宿屋の女中らの話は先ずこうである。成程ひどい奴だと半七らも云つたが、お国と清七が合意の心中である以上、表向きには友蔵をどうすることもできないのは判つているので、その上の詮索もしなかつた。明くる朝、宿屋を立て、宿^{しゆく}のはずれへ来かかると、きのうの男の兇が二、三人の友達と往來に遊んでいるのを見付けたので、幸次郎は声をかけた。

「おい、おい。お化けの出る家と云うのは何処だえ」

「あすこだよ」と、男の児は指さして教えた。それは七、八軒さきの小さい茅葺屋根の田舎家で、強い風には吹き倒されそうに傾きかかっていた。その軒さきには大きい槐の樹が立っていた。

どうで通り路であるから、その家の前を行き過ぎながら、三人は横眼に覗いてみると、槐の樹の股に一羽の大きい鶉がつないであつて、その足に「うりもの」としるした紙片が結び付けられていた。それを幸いと、善八は立ち寄って呼んだ。

「もし、この鳥は売り物ですかえ」

うす暗い奥にはひとりの男が衾をかぶつて転がっていたが、それでも眼を醒ましていたと見えて、直ぐに半身を起こして答えた。

「むむ、売り物だよ」

「幾らですな」

「三步だよ」

「高けえね」

「なに、高けえことがあるものか」

云いながら起きて来たのは、年ごろ四十二、三の、色の赭黒い、頬ひげの濃い、見るからに人相のよくない大男であった。彼は三人をじろじろ睨んで、俄かに声をあらくした。

「え、ひやかしちやあいけねえ。おめえ達はその鳥を知っているのか。それは鶉だよ。荒鶉だよ。おめえ達のような人間の買う物じやあねえぜ」

「鶉は知っているが、値を訊いてみたのよ」と、善八は答えた。

「それだからひやかしだと云うのだ。江戸の人間が鶉を買って行って、どうするのだ。それとも此の頃の江戸じやあ、鶉を煮て喰うのが流行るのか。朝つばらからばかばかしい。帰れ、帰れ」と、彼は眼をひからせて呶鳴った。

「まあ、堪忍してくんねえ」と、半七は喙をいれた。「まったくおめえの云う通り、鶉を買って行つても土産にやあならねえ。話のたねに値段を訊いただけのことだから、ひやかしと云われりやあ一言もねえ。だが、この鶉は何処で捕ったのだね」

「四、五日前に何処からか飛び込んで来たのよ。おおかた明神の森へ帰る奴が戸惑いをしたのだらう。森にいる奴を捕るのはやかましいが、おれの家へ舞い込んで来たのを捕るのは、おれの勝手だ。そいつは荒鶉のなかでも荒い奴だから、うっかり傍へ寄って喰い付かれても知らねえぞ。馴れている俺でさえも怪我をした」

云い捨てて彼は奥へはいつてしまった。もう相手にならないと見て、半七は挨拶をしてそこを立ち去った。

「あいつが友蔵か。成程、可愛くねえ奴らしい」と、幸次郎はあるきながら云った。

「善ぱが詰まらねえひやかしをするので、あんな奴にあやまる事になった」と、半七は笑った。

「本当に幽霊が出るか出ねえか知らねえが、あんな奴のところへ出たら災難だ。幽霊に肩を揉ませるか、飯を炊かせるか、判ったものじゃあねえ」

三人はその日の午過ぎに江戸へ帰り着いた。新宿で遅い午飯ひるめしを食って一と休みして、大木戸を越して四谷通りへさしかかると、塩町ちようの中ほどで幸次郎は急に半七の袖をひいた。

「もし、親分。和泉屋というのはそこですよ」

そこには和泉屋という暖簾のれんをかけた呉服屋が見えた。悪い奴に引つかかって、大事の息子を心中させて、気の毒なことをしたと思いつながら、半七はそつと覗くと、四間間口まぐちで、幾人かの奉公人を使つて、ここらでは相当の旧家であるらしく思われた。これだけの店の息子が二十両や三十両のことで命を捨てるにも及ぶまいにと、半七はいよいよ気の毒になつた。

「ほかにも何か仔細があるかな」と、半七は又かんがえた。

三

この年の花どきは珍らしく好い天気の日がつづいて、花にあらしの祟りもなかったが、四月に入ってから陰くもった日が多かった。そのあいだには卯の花ぐたしの雨が三日も四日も降りつづいて、時候はずれに冷える日もあった。それでも五月の節句前から晴れて、三、四、五、六、七の五日間は初夏らしい日の光りが、江戸の濡れた町をきらきらと照らした。ほかの仕事が忙がしいので、半七も忘れていたが、五月はじめは府中の祭りである。六所明神の例祭は三日に始まって、六日の朝に終る。そのあいだすべて晴天であつたのは仕合わせで、諸方から集まる参詣人の混雑も思いやられた。

その八日の午後である。半七は下谷まで用達しに行つて帰ると、幸次郎が一人の客を連れて来て、親分の帰るのを待っていた。

「親分、天气がまた怪しくなつて来ましたね」

「むむ。どうも長持ちがしねえので困つたものだ。また泣き出しそうになつて来た」

云いながら不^ふ図^と見ると、眼の前にも泣き出しそうな顔をした人が坐っていた。それは四十前後の瘦形の男で、お店^{たな}の番頭ふうであることは一と目に知られた。幸次郎はすぐに紹介した。

「この人は四谷坂町^{まち}の伊豆屋という酒屋さんの番頭さんですが、少し親分にお問い合わせ申してえことがあるので、わつしが一緒に連れて来ました」

その尾について、男も伊豆屋の番頭治兵衛であると名乗った。半七も初対面の挨拶をして、さてその用件を聞きただすと、治兵衛は重い口からこんなことを語り出した。

「ひと通りのことはさつき幸次郎さんにもお話し申したのでございますが、手前どもの店に少々困ったことが出^{しゅつ}来^{たい}いたしました……」

自分を目ざして頼みに来る以上、いずれ何かの事件が出来したのは判り切っているので、半七は相手の話を引き出すように気軽に答えた。

「はあ、そうですね。そこで、その一件というのは何か面倒なことですかえ」

「実はこの五日のことでございますが、御承知の通り、府中の六所明神の御祭礼、その名物の闇祭りを一度見物いたしたいと申しまして、おかみさんと総領息子、それにわたくしと若い者の孫太郎と、都合四人づれで六ツ半（午前七時）頃から店を出しました。勿論おか

みさんだけは駕籠で、男共は歩いて参りました。日の長い時節ではございますが、途中で休み休み参りましたので、府中の宿へ着きました頃には、もう薄暗くなって居りました。さてこのお祭りには初めて参ったのでございますが、噂に聞いたよりも大層な繁昌で、土地馴れない者はまごつく位、それでもどうやら釜屋という宿屋に泊めて貰うことになりましたが、その宿屋がまた大変な混雑で、これでは困ると思ったのですが、どこの宿屋も今夜はみんなこの通りだと聞かされて、まあ我慢することになりました」

「わたしもこの三月、府中に泊まりましたが、ふだんの時だから至ってひっそりしていましたが」と、半七は笑った。「しかしお祭りの時は大変だと、女中たちも云っていましたが」「まったく案外でございました」と、治兵衛は溜め息をついた。「それほど大きくもない宿屋に百何十人という泊まりですから、一つの部屋に十五人も二十人も押し込まれて、坐る所もないような始末。お夜食の膳もめいめいが台所へ行って、自分が貰って来なければならぬ。まるで火事場のような騒ぎでございます。こんな事と知ったら来るのじゃあなかつたど、おかみさんも後悔していましたが、今さら帰るにも帰られず、まあ小さくなつて辛抱して居りますと、やがて四ツ（午後十時）過ぎでもございましょうか、唯今お神輿みこしのお通りでございます。灯を消しますと触れて廻る声聞きこえたかと思うと、内も外も一

度に灯を消して真つ暗になってしまいました。

それ、お通りだというので、我れも我れもと店さきへ手探りながら駈け出しましたが、なんにも見えません。暗いなかでお神輿の金物かなものがからりからりと鳴る音と、それを担いで行く白丁はくちようの足音がしとすと聞こえるばかり。お神輿は上の町のお旅所たびしよへ送られて、暗闇のなかで配膳の式があるのだそうで……。そのあいだは内も外も真つ暗でございます。夜なかの八ツ（午前二時）頃に式を終わりますと、一度にぱつと灯をつけて、町じゅうは急に明るくなりました。くどくど申す通り、それまでは真の闇で、どこに誰がいるかさっぱり判りませんでした。さて明るくなつて見ると、おかみさんの姿が見付かりません。若旦那も孫太郎も、わたくしも心配して、混雑のなかを抜けつ潜りくぐりつ、そこらを頻りに探して歩きましたが、どうしても姿が見えません。

なにしろ夜なかではあり、大変な混雑ですから、どうすることも出来ません。夜が明けたら何処からか出て来るだろうと、三人は一睡も致さずに、夜の白らむのを待つて居りましたが、おかみさんの姿はどうしても見えません。そのうちに日が高くなって、ほかの客はだんだんに引き揚げてしまいました。わたくし共は帰ることが出来ません。宿屋の者にも頼みまして、心あたりを隈なく探させましたが、なんにも手がかりがありません。

その晩はどうとう府中に泊まりましたが、おかみさんは帰って参りません。店の方でも心配しているだろうと存じまして、三人相談の上で、孫太郎だけが府中に残り、若旦那とわたくしは早駕籠で江戸へ戻りました。

主人もおどろきまして、親類などを呼びあつめて、ゆうべは夜の更けるまでいろいろ相談を致しましたが、みんなも心配するばかりで、さてどうという知恵もございません。町内の下駄屋さんがこの幸次郎さんとお心安くしていると云うことを聞きまして……」

「そういうわけで、わつしの所へ頼みに来なすつたのですが……」と、幸次郎は取りなすように云った。「わつし一人で請け合うわけにやあ行かねえ。まして江戸から五里七里と踏み出す仕事だから、親分にすがつて何とかして貰おうと云うので、こうして一緒に出て来たのですが、どうでしょう、なんとかかなりますめえか。番頭さんもひどく心配してなさるんですが……」

「若い者では無し、いい年をしたわたくしが供をして参りまして、おかみさんの姿を見失つたと申しては、主人は勿論、世間に対しても申し訳がございません。これがお武家ならば、腹でも切らなければならぬ処でございます。親分さん。お察しく下さい」

四十男の治兵衛が涙をうかべて頼むのである。殊に幸次郎の口添えもある以上、半七も

断わるわけにも行かなくなつた。

「まあ、ようござんす。出来ることか出来ないことか知りませんが、折角のお頼みですから、なんとかやつてみましょう」と、半七は請け合つた。「おい、幸。この春、初めて府中へ行つたのも、何かの因縁かも知れねえ」

「そうですねえ」と、幸次郎もうなずいた。「そこで、親分。この番頭さんに何か訊いて置くことはありませんかえ」

「大有りだ。早速だが、そのおかみさんというのは幾つで、どんな人ですな」

「おかみさんはお八重と申しまして、十八の年に伊豆屋へ縁付いてまいりまして、翌年に総領息子の長三郎を生みました。その長三郎が当年二十歳はたちになりますから、おかみさんは三十八で、容貌きりようも悪くなく、年よりも若く見える方でございます」

治兵衛は半七の問いに対して、伊豆屋は四谷坂町に五代も暖簾のれんをかけている旧い店で、屋敷方の得意さきも多く、地所家作も相当に持つていて身しんしょう上も悪くない。主人の長四郎は四十三歳で、子供は長三郎のほかに、十七歳の四万吉よもぎち、十四歳のお初がある。奉公人は自分のほかに、若い者が三人、小僧が二人、女中二人、あわせて十三人の家内であると答えた。

「おまえさんの家では塩町の和泉屋という呉服屋を御存じですかえ」と、半七は突然に訊いた。

「和泉屋さんは存じて居ります。別に親類というのではございませんが、先代からお附き合いをいたして居ります」

「和泉屋の息子は飛んだ事でしたね」

「まったく飛んだ事で……。あの一件につきましては、和泉屋さんでも、息子の死骸を引き取るやら何やかやで、随分の物入りであったそうで、なんとも申しようがありません。そんな一件がありますので、今度の府中行きも、主人は少し考えて居りました。わたくしも何だか気が進まなかつたのでございますが、おかみさんが是非一度見物したいと申しますので、とうとう思い切つて出かける事になりますと、又ぞろこんな事が起こりまして……。やっぱり止せばよかつたと、今さら後悔して居りますような訳でございます」

「和泉屋の奉公人で、息子と一緒に府中へ行った者がありましたね」と、半七はまた訊いた。

「はい。幾次郎と申す者でございます」と、治兵衛は答えた。「これがちつと道楽者で、主人の息子を調布の女郎屋へ誘い込みましたのが間違いのもとで、それからあんな事にな

りましたので、主人に対しても申し訳のない次第でございますが、幾次郎は唯の奉公人でなく、主人の遠縁にあたる者でございますので、まあ、そのままに勤めて居ります」

「幾次郎は幾つでしたね」

「たしか、二十三かと思えます。唯今も申す通り、堅気の呉服屋の手代にはちつと不似合いの道楽者で、近所の常盤津の師匠のところへ稽古に行くなぞという噂もございます」

「その幾次郎はお店へも来ることはありませんか」

「ときどきには参ります」

それからまだ二つ三つの話をして、治兵衛は帰った。帰る時にも彼は何分お願い申しますと、幾たびか繰り返して頼んで行った。

四

「親分、どうですかね。大抵見当は付きましたか」と、幸次郎は訊いた。

「そう手軽にも行かねえ」と、半七は笑った。「去年の心中一件と、今度の一件と、まるで縁のねえ事か、それとも何かの糸が繋がっているのか、まずそれを考えなけりやならね

え」

「友蔵の奴が又なにかやったかね」

「おれもそんな事をかんがえたが、若い娘ならばともかくも、やがて四十に手のとどく女房をかどわかすということもあるめえ。いくら暗闇だつて、まわりに大勢の人がいるのだから、きやあとか何とか声を立てるぐらいのことは出来そうなものだ。まさかに友蔵に引つ担いで行かれたのでもあるめえ。おれももう少し考えるから、おめえは善ぽと手分けをして、伊豆屋と和泉屋の内幕を探つてくれ」

「こうなると此の春、府中へ行つて来て好うござんしたね」

「むむ。なにが仕合わせになるか判らねえ。だしぬけにこんな事を持ち込まれたのじゃあ見当が付かねえ」

幸次郎を出してやつて、半七は又しばらく考えた。伊豆屋の番頭の話だけでは詳しいことは判らない。番頭もまた一家の秘密を洩らすまい。したがつて、その話のほかに、伊豆屋と和泉屋にからんで如何なる秘密がひそんでいないとも限らない。所詮しよせんは幸次郎と善八の報告を待つて、それから正確の判断をくだすのほかはなかつたが、半七は平生の癖として、ともかくも今までに与えられた材料によつて一応の推測を試みようとした。中あたつて

も外れても、考えるだけは考えなければ気が済まないものであった。

表には苗売りの声がきこえた。けさから催していた雨がしずかに降って来た。その雨の音を聞きながら、半七は居眠りでもしたように目を瞑じていたが、やがて手拭いと傘を持って町内の銭湯へ出て行った。

雨はだんだんに強くなつて、夕暮れに近い空の色はますます暗くなった。湯から帰って来た半七の顔色も暗かった。子分ら二人が何かの報告を持って来るまでは、自分の肚はらをはつきりと決め兼ねたのである。

雨は明くる日も降りつづいて、本式の梅雨空つゆぞらとなった。その日の暮れかかる頃に、善八が先ず顔をみせた。

「いよいよ梅雨になりました。ゆうべ幸次郎の話聞いたので、けさから早速取りかかりました」

「おめえはどっちへ廻つたのだ」と、半七は待ち兼ねたように訊いた。

「わつしは塩町の呉服屋の方です。そこで先ず聞き込んだだけのことをお話し申しませう」と、善八は云い出した。「和泉屋という家は店構えを見ても知られる通り、土地でも古い店で、身代もすっかりしているという噂です。主人の久兵衛は五十ぐらい、女房のお

大は後妻で三十四、五、先妻にも後妻にも子がないので、主人の甥の清七を養子に貰って、二十二の年まで育てて来ると、その清七は調布のお国と心中してしまったという訳です」

「清七は養子か」

「本来はおとなしい、手堅い人間だったそうですが、府中へ行った帰りに一と晩遊んだのが病み付きで、飛んだ事になったものだと、近所でも気の毒がっています。それから手代の幾次郎ですが、主人の遠縁の者だという事になっているが、実は番頭の息子だそうです。それにはちつと訳があるので……」

今から二十年ほど前に、和泉屋の番頭勇蔵がじゅろう入牢した。それは紀州家か尾張家かへ納めた品々に、何か不正のことがあったと云うのである。その吟味中に勇蔵は牢死した。しかも世間の噂では、主人の罪を番頭がいつさい引き受けて、主人はなんにも知らない事に取りつくろったのであると云う。その忠義の番頭勇蔵のせがれが幾次郎で、当時はまだ二、三歳の子供であったのを、母のおみのが引き連れて、甲州の身寄りの方へ立ちのいた。もちろん和泉屋では相当の扶助をしてやつたに相違ない。

その幾次郎が八つか九つに成人した時に、恐らく前々からの約束があったのであろう。江戸へ出て来て旧主人の和泉屋に奉公することになった。表向きは遠縁の者だと云うこと

にして、主人も特別に眼をかけて使っていた。和泉屋に子が無いので、番頭の忠義に報いるために、或いはこの幾次郎を養子にするのでは無いかと云う者もあったが、その想像は外れて、主人の甥の清七が十三の年から貰われて来た。幾次郎はやはり奉公人として働いていて、彼が堅気の店の者に似合わず、稽古所ばいりをしたり、折りおりには新宿の遊女屋遊びをしたりするのを主人がおおも大目に見ているのも、亡父の忠義を忘れない為であろう。たとい養子には据わらずとも、ゆくゆくは暖簾でも分けて貰って、一軒の店の主人になるであろう、と、昔を知るものは噂している。

「成程、幾次郎という奴には、そういう因縁があるのか」と、半七はうなずいた。「そこで、その幾次郎は相変わらず店に働いているのか」

「きょうも店に坐っていました」と、云いかけて、善八は少しく声を低めた。「近所の噂だけで、確かなことは判らねえのですが、和泉屋の女房は節句の晩あたりから家うちにいねえらしいと云うのです。もちろん和泉屋じゃあ内証にしていますが、店の小僧が使に出たとき、誰かにしやべったそうで……」

「和泉屋の女房もいねえのか」と、半七も眼をひからせた。「節句の晩といえれば府中の闇祭りの晩だ。その同じ晩に、伊豆屋の女房は府中で姿をかくし、和泉屋の女房は江戸で姿

を隠す。いかに両方が知合いの仲だと云つても、まさかに女同士が誘い合わせて駆け落ちをしたわけでもあるめえ。妙な事になったものだな」

女房二人のあいだに何かの係り合いがあるのか、但しは偶然の一致か、半七もその鑑定に苦しんだ。善八も黙つて考えていた。

「ああ、降る、降る」

ひとり言のように云いながら、幸次郎がはいつて来た。

「どうだ。何かおもしろえ掘出し物があつたか」と、彼は善八に訊いた。

「むむ、まず一と通りは判つた」と、半七は引き取つて答えた。「第一の聞き込みは、和泉屋の女房も闇祭りの晩に姿をかくしたと云うことだ」

「ふむう」と、幸次郎も眼を丸くした。「そりやおもしろえ。そこで親分。善八と違つて、わつしの方にやいい見付け物ありません。伊豆屋のことは大抵あの番頭の云つた通りですが、近所で訊くと、伊豆屋の主人はお人好しの方で、お八重という女房が内外のこゝとを一人で切つて廻している、いわばかかあてんか鼻天下の家だそうで、もう年頃の息子や娘がありながら、お八重は派手なこしらえで神詣りにもたびたび出て歩くという評判です」

「別に浮気をしているような噂もねえのか」と、半七は訊いた。

「そんな女だから何か不埒を働いていやあしねえかと思って、わっしもいろいろ探ってみました。そんな噂もねえようです。よつほど上手にやっているんでしうか」

「和泉屋の手代の幾次郎とおかしいと云う噂は聞かねえか」

「聞きませんね。よそでそんな噂があるんですか」

「それでもねえが、まあ訊いてみたのだ」

こう云つて、半七はまた考えている処へ、女房のお仙が女中に鯨の大皿を運ばせて来た。どこからか届けて来たと言うのである。商売柄でこんな遣い物を貰うのは珍らしくない。すぐに茶をいれさせて、半七ら三人は鯨を喰いはじめると、そのそばで女房がこんなことを話し出した。

「わたしが今、お湯の帰りに自身番の前を通ると、雨が降るのに人立ちがしているから、なんだろうと思つて覗いてみると、隣り町のしん吉のおっかさんが自身番へ駈け込んで、おいおい泣いているのよ」

しん吉というのは落語家しん生の弟子で、となり町の裏に住んでいる。年は二十四、五で、男前は悪くないが芸が未熟であるために、江戸のまん中の良い席へは顔を出されず、場末や近在廻りなどをして、母のおさがと二人で暮らしている。それでも芸人の端くれで

あり、且は近所でもあるので、半七はしん吉親子の顔を識っていた。

「しん吉のおふくろは何を泣いているのだ」

「それがね。なんだか取り留めのない話のようだけれども、おつかさんは一生懸命に泣いて騒いでいる。と云うのは、しん吉は先月から甲州街道の方角へ稼ぎに行つて、月ずえには江戸へ帰る筈のところ、今月になつても使りが無い。おつかさんも毎日心配していると、おとといの晩、おつかさんが変な夢を見たんだとさ」

「どんな夢を見た……」

「おつかさんが火鉢のまえに坐つてしていると、しん吉が外からぼんやりはいつて来て、だまつて手をついている。おや、お帰るかえと声をかけても返事をしない。なぜ黙つて俯向いているんだよと云うと、しん吉は小さな声で、顔を見せると阿母おつかさんがびつくりするからと云う。おまえの顔を見てびつくりする奴があるものか、旅から帰つて来たたら先ず無事な顔を親に見せるものだ、早く顔をお見せよと云うと、しん吉がひよいと顔をあげた……」

ここまで話して来て、お仙は思わず息をのみ込むと、幸次郎は笑いながら口を出した。

「なんだか怪談がかって来たようだね」

「まったく怪談さ」と、お仙は顔をしかめた。「しん吉が顔をあげると、顔は血だらけ……」

…。なんでも砂利のような物で引っこすったように、顔一面に摺りむけている。おつかさんも驚いてきやつと云うと、夢が醒めた……。もしやこれが正夢まさゆめで、せがれの身の上にか何か変事でもあつたのじゃあ無いかと、おつかさんも頻りに案じていると、ゆうべも同じ夢をみて、せがれの顔はやつぱり血だらけ……。いよいよ心配していると、きよの宵の口、おつかさんが銭湯から帰つて来ると、暗い家のなかにしん吉がしよんぼりと坐っている。それが振り向くと、やつぱり血だらけの顔をしていたので、おつかさんはもう声が出なかつたそうで……。これはどうしても唯事でない。せがれは何処でか非業ひじょうの最期を遂げたに相違ないと、おつかさんは半氣違ひのようになつて自身番へ泣き込んで来たと言うわけさ。自身番だつてどうすることも出来ない。お前があんまり心配するから、そんな夢を見たのだからとか、夢は逆夢さかゆめだとか云つて、まあいい加減になだめているのだが、親ひとり子ひとりの伴にもしもの事があつたら、あたしも生きちゃあいられないとか云つて、おつかさんは泣いて騒いでいる。そのうちに大屋おおやさんが来て、無理になだめて引つ張つて帰つたが、考えてみれば可哀そうでもあり、しん吉は一体どうしたのかねえ」

聴いている三人は顔を見あわせた。外には暗い雨が小歇こやみなく降っていた。「なるほど怪談だ」と、善八は冷えた茶を飲みながら云つた。「だが、自身番で云う通り、

お袋があんまり心配しているので、せがれの夢を見たり、せがれの姿を見たりしたのでらう。そんな事とは知らねえで、しん吉の野郎、近在をまわってちつとふところが暖あつたまったので、今頃どこかの宿しゆくば場でおもしろく浮かれているかも知れねえ。親不孝な野郎だ」

「おい、お仙。傘を出してくれ」

半七は立ちあがって帯を締め直した。

「どこへ行くの」

「しん吉のおふくろに逢って来る」

「親分。怪談を真まに受けて行くのかえ」と、幸次郎は半七の顔をみあげた。

「真に受けても受けねえでも、ちつと思ひあたることがある。おれの帰るまで、おめえ達は待っていてくれ」

降りしきる雨の中を、半七は隣り町へ出て行った。

五

その明くる朝、半七は八丁堀同心の屋敷へ顔を出して、かくかくの次第で四、五日は江

戸を明けると云うことを届けた上で、朝の四ツ（午前十時）頃に府中をさして出発した。幸次郎も善八も一緒に出た。

幸いに強い雨ではなかったが、きようもしとしと降りつづいている。先度のせんど小金井行きとは違って、三人は雨支度の旅すがたで、菅笠、道中合羽、脚絆、草鞋に身を固め、半七はふところところに十手を忍ばせていた。道順も先度とは少し違って、上高井戸から烏山、金子、下布田、上布田、下石原、上石原、車返し、染屋と甲州街道を真っ直ぐにたどって、府中の宿に行き着いたのは、七ツ半（午後五時）を過ぎる頃であった。

宿屋は先度の柏屋で、三人はここに濡れ草鞋をぬぐと、顔を見おぼえている宿の者は丁寧に案内して二階座敷へ通した。祭りの済んだ後といい、この天氣に道中の旅びとも少ないとみえて、この二階はがら明きであった。

このあいだの遊ゆ山旅さんたびとは違うので、風呂にはいつて夕飯を済ませた後に、半七は宿の亭主を二階へ呼びあげて、自分たちの身の上を明かした。

「この宿しゆくに釜屋という同商売があるね」

「はい。手前共から五、六軒さきでございます」

「すこし訊きたいことがあるから、釜屋の亭主を呼んで来てくれ」

「はい、はい」

亭主はかしこまって、早々に釜屋の亭主文右衛門を呼んできた。文右衛門は四十五、六の篤実らしい男であった。江戸の御用聞きに呼び付けられて、彼は恐るおそる挨拶した。

「手前は釜屋文右衛門でございます。なにか御用でございましょうか」

「早速だが、この五日の闇祭りの晩に、おめえの店の女客が一人消えてなくなったそうだね。きょうでもう五日になる。まだなんにも手がかりはねえのかね」

「四谷坂町の伊豆屋のおかみさんが見えなくなりまして、手前共でも心配して居るのでございますが、まだなんにも手がかりがございませんので、実に困って居ります。なにぶんにも当夜は百四五十人の泊まり客で、二階も下もいっぱいの混雑、殊に火を消した暗闇の最中で、何がどうしたのか一向に判りません」と、文右衛門は云い訳らしく云った。

「そこで、その祭りの前の頃から、おめえの家に若い芸人が泊まっていなかったかね」

「はい。泊まって居りました。しん吉という江戸の落語家はなしかでございませう」「いつ頃から泊まったね」

「しん吉さんは先月からこの近辺をまわって居りまして、ここでも東屋あずまやという茶屋旅籠屋の表二階で三晩ほど打ちました。一座の五人はそれから八王子の方へ行きましたが、し

ん吉さんは体が少し悪いと云うので、自分だけはあとに残って、先月の晦日みそかから手前共の二階に泊まって居りまして、闇祭りの日の午ひるすぎに、これから一座のあとを追って行くと云つて立ちました」

「この宿しゆくはずれに友蔵という厄介者がいる筈だが、あれはどうしたな」と、半七はまた訊いた。

「友蔵は無事で居ります。これも先月の晦日ごろでございましょうか、江戸の方へ二、三日遊びに行つたとか申して居りましたが、唯今は帰って居りまして、現にきのうも手前ども店の前を通りました。博奕にでも勝つたと見えまして、それから女郎屋へまいつて景気よく飲んで騒いでいたとか申します」

「鵜でも売れたのだろう」と、半七は笑つた。

「いえ、鵜はまだ売れません。家の前に売り物の札ふだが付いて居ります」と、文右衛門はまじめに答えた。

「伊豆屋の若い者はどうしたね」

「きのうまで手前共に逗とうりゆう留りゆうでしたが、いつまでも手がかりが無いので、いったん江戸へ帰ると云つて、今朝ほどお立ちになりました」

「それじゃ行き違いになつたか」

釜屋の亭主を帰したあとで、半七は善八にささやいた。

「おめえは友蔵の家を知っているだろう。あいつは今夜、家にいるかどうか、そつと覗いて来てくれ」

「ようがす」

善八はすぐに出て行つた。

「友蔵の奴を挙げますかえ」と、幸次郎は訊いた。

「あいつ、どうも見逃がせねえ奴だ。不意に踏み込んで調べてやろう。先月の晦日ごろに江戸へ出たといい、景気よく銭を遣つていい、なにか曰くがあるに相違ねえ」

やがて善八は帰つてきた。

「友蔵は家で酒を喰らつていますよ」

「友達でも来ているのか」

「それがね。髪も形も取り乱しているが、ちよいと踏めるような中年増に酌をさせて、上機嫌に何か歌っていましたよ」

「それが例の幽霊かな」と、幸次郎は云つた。

「なるほど蒼い顔をしていたが、確かに幽霊じゃねえ。第一、友蔵の娘という年頃じゃあなかつた」

「よし」と、半七はうなずいた。「野郎ひとりに三人がかりも仰ぎょうさん山だが、折角来たものだから、総出としよう。おれは此のまままで宿屋の貸下駄をはいて行く。野郎、あばれるといけねえから、おめえ達は支度をして行つてくれ」

三人は宿やどを出ると、今夜ももう五ツ（午後八時）過ぎで、まばらに暗い町の灯は雨のなかに沈んでいた。この宿しゆくには三、四軒の女郎屋がある。その一軒の吉野屋という暖簾をかけた店から、ひとりの若い男が傘もささずに出て来ると、又あとから其の相あいかた方らしい若い女が跣足はだしで追つて来た。

「しんさん、お待ちよ」

「知らねえ。知らねえ」

男は振り切つて行こうとするのを、女は無理にひき戻そうとして、たがいに濡れながら争っている。宿場の夜の風景、別にめずらしいとも思われなかつたが、しんさんと云う声が耳について、半七は不図みかえると、男はかのしん吉であつた。

「おい、しん吉、いくら江戸を離れていると云つて、往来なかで見つともねえぜ」

だしぬけに声をかけられて、しん吉は降り返った。格子さきの灯のひかり、彼は半七の顔をすかして視ると、俄かにおどろいて逃げ出そうとしたが、その利き腕はもう半七の片手につかまれていた。こうなつては逃げるすべもない。彼は無言の半七に引き摺られて、二、三軒さきのうす暗いところへ連れて行かれた。

「やい、しん吉、てめえは太てえ奴だ。坂町の伊豆屋の女房をかどわかして何処へやった。さあ、云え。てめえは伊豆屋の女房と謀ししめ合わせて、自分は前から釜屋に待っていて、闇祭りのくらやみに女房を連れて逃げたろう。おれはみんな知っているぞ、どうだ」

しん吉は黙っていた。

「それにしても、伊豆屋の女房をどこへやった。もう三十八の大年増だ。まさかに宿場女郎にも売りやあしめえ。あの女房をどこへ葬ったよ」

しん吉はやはり答えなかった。彼は一生懸命に半七を突きかけて又逃げ出そうとするのを、背後うしろからどんと突かれて、往来のまん中へ比目魚ひらめのように俯伏して倒れた。

「縄にしますか」と、幸次郎はしん吉の襟首を捉えながら訊いた。

「むむ。柏屋へ連れて行け。逃がすな」

縄つきのしん吉を幸次郎に預けて、半七と善八は友蔵の家へむかった。暗いなかにも目

じるしの槐えんじゆの大樹のかけに隠れて、二人は内の様子をうかがうと、内には女の忍び泣きの声こわがきこえた。毀れかかった雨戸の隙間すきまから覗くと、うす暗い行燈の下に赤裸の女が細引のような物にくくられて転がされていた。女は破れ畳に白い顔を摺りつけて泣いているのを、友蔵はおもしろそうに眺めながら茶碗酒を呷あおっていた。

「あの女ですよ。さつき酌をしていたのは……。よもや幽霊じゃありませんめえ」と、善八は小声で云った。

「むむ。戸を叩け」と、半七は指図した。

「ごめんなさい。今晚は……」

善八が戸をたたくと、友蔵は茶碗を下に置いて、表を睨みながら答えた。

「だれだ。今ごろ来たのは……」

「おれだよ。このあいだの鵜を買いに来たのだ」と、半七は云った。

「なに、鵜を買いに来た……」

「あの鵜を百両に買いに来たのだ」

「冗談云うな」

とは云いながら、幾分の不安を感じたらしく、友蔵は身がまえしながら雨戸をあけに出

た。その雨戸は内そこから同時にがらりと明けられて、善八はすぐに飛び込んだが、相手も用心していたので、もろくは押さえられなかった。殊にしん吉とは違って、頑丈の大男である。二人は入口の土間を転げまわって揉み合ううちに、友蔵は善八を突きつけて表へ跳り出ようとする、その横つ面に半七の強い張り手を喰らわされて、思わずあつと立ちすくむところを、再び胸を強く突かれて、彼はあと戻りして土間に倒れた。善八は折り重なって縄をかけた。

「なんでおれを縛りやあがるのだ」と、友蔵は咩^ほえるように呶鳴った。

「ええ、静かにしろ。おれは江戸から御用で来たのだ」と、半七は云った。

眼のさきに十手を突き付けられて、友蔵もさすがに鎮まった。

六

「お話はもうお仕舞いです」と、半七老人は笑った。「あとはあなたの御想像に任せます
ト」

「いや、事件がなかなかこぐらかつているので、容易に想像が付きません」と、わたしも

笑った。

「じゃあ、この友蔵の家に転がされていた女は、伊豆屋の女房か、和泉屋の女房か、あなたはどっちだと思います」

さかねじの質問を受けて、わたしは返事に困った。黙っているのも口惜しいので、わたしは出たらめに答えた。

「和泉屋の女房のようですね」

「ふむう」と、老人はわたしの顔を眺めた。「どうして判りました」

そう訊かれて、わたしはまた困った。

「どうと云うこともないので……。唯なんだか和泉屋のようだと思っただけですよ」

「そのようだと云うことが大切です」と、老人はまじめに云った。「明治のこんにちは警察のやりかたもすっかり変って、探偵の方法も新らしくなりましたが、昔の探索には何々のようだとか、誰誰のようだとか、まずわれわれの胸に泛かぶ。それがなかなかの役に立って、ようだと睨んだことが不思議にあたった例がしばしばあるので……。そうです、わたしが家に坐って、眼をつぶって、腕を拱くんで、どうもそうらしいようだと考えていた事が、まず大抵は壺はまに嵌はまりましたからね。あなたの鑑定通り、その女は呉服屋の女房のお大

でした」

「お大は家出をして、府中へ行つたんですか」

「そうです。わたくしは最初から和泉屋の手代の幾次郎という奴を、なんだか怪しいと睨んでいたので、やっぱりこいつが曲者でした。前にも申す通り、おやじの勇蔵が主人の罪をかぶって牢死した。その忠義に免じて、和泉屋でも眼をかけて使っていた。和泉屋には子がないので、行くゆくは養子にしてくれるかと内々楽しみにしていると、主人の親類から清七という養子が来てしまったので、幾次郎は^{あて}的がはずれた。それが、そもその始まりで、^{やけ}自棄も手伝つて道楽をする。それでも主人が^{おおめ}大目に見ているので、だんだんに増長して和泉屋乗っ取りを企てる事になりました。その場合、あなたならどうします」

「さあ、まず養子の清七を遠ざけるんですね」

「だれの考えも同じことで、まあそうするのほかはありません。和泉屋の女房は後妻で、亭主の久兵衛とは年がよほど違っている。そこで何日かそのお大と不義を働くようになった。幾次郎に取つては^{もつけ}勿怪の幸い、せいぜい女房の御機嫌を取つて清七放逐の計略をめぐらしたが、あいにく清七がおとなしい男で、難癖をつけるような^{とが}科が無い。そのうちに一^お昨年としの五月、幾次郎は清七を府中の闇祭りに連れ出して、その帰りに調布の甲州屋へ誘い

込んだ。こうして道楽の味をおぼえさせて、だんだんに清七を墮落させ、それを落ち度にして和泉屋から放逐するという魂胆でしたが、その薬が利き過ぎて、相方のお国は清七に初しよかい会惚れ、清七の方でも夢中になる。さあ占めたと、幾次郎とお大は肚はらをあわせて主人の久兵衛にいろいろの讒言をする。久兵衛も馬鹿な男ではないのですが、自然それに巻き込まれて、清七の信用は次第に薄くなる。それでも清七の迷いは醒めないで、二十五両の金を持ち出してお国を身請けという事になったのです。勿論、幾次郎も蔭へ廻ってそのかしたに相違ありません。

ところが、お国には友蔵という悪い親父が付いているので、いい鴨がかかったとばかりで、二十五両を横取り、喧嘩仕掛けで清七を逐い出してしまった。根がおとなしい人間ですから、清七はくやしさが胸いっぱい、もう一つには近ごろ養父や養母の機嫌を損じて、まかり間違えば離縁になるかも知れないと云うようなことも薄々感じている。二十五両の金とても帳合いをごまかした金だから、それが露顕すればいよいよ自分の身があやうい。お国もそれに同情して、又二つには邪じゃけん慳な親父への面当てもあつたのでしよう、二人はとうとう心中という事になる。大願成就と幾次郎は手を拍うって喜んだのです」

「それじゃあ二人は幾次郎のところへも化けて出ていいわけですね」

「友蔵も悪いが、幾次郎は一倍悪い。まったく幾次郎の方へ幽霊が出そうなものですが、二人ともに幾次郎の巧みを知らなかったのでしょう。そこで内からは女房のお大が糸を引いて、清七の後あしがま釜に幾次郎を据える段取りになったのですが、主人も直ぐには承知しない。ふだんから大目に見ているものの、幾次郎が道楽者ということは主人もよく知っているので、それを相続人にして清七の二の舞をやられては困る。その懸念があるので主人も渋っている。

そうして半年ばかり過ぎすうちに、お大は此のごろ幾次郎にむかって、二人が仲を主人に薄々感付かれたらしいから、いつそ連れて逃げてくれと云い出しました。そんな筈は無いから、まあ我慢しろと幾次郎がなだめても、お大は肯きかない。しかし幾次郎にしてみると、主人の女房と不義を働いているのも、和泉屋の養子に直つて、その身代を手に入れたいからで、もう一と息というところまで漕こぎ付けながら、その大望を水の泡にして、年上の女と駆け落ちなどをする気はありません。しかしお大の方では頻りに迫つて来る。もう忌いやとは云われない破目になって、幾次郎はまた悪巧みを考えました。その片棒をかついだのが彼かの友蔵です」

「幾次郎は友蔵を識つていたのですか」

「去年の心中一件のときに、友蔵は和泉屋へ押し掛けて来て、自分が二十五両を横取りした事などはいっさい云わず、この息子のために大事の娘を殺されてしまったから、どうかしてくれと因縁を付ける。その時に幾次郎が仲に立って、三十両の金を渡して追い返した。それが縁になって、幾次郎は友蔵を識っている。あいつは悪い奴で、金にさえなれば何でも引き受ける奴だと云うことも知っているので、今度の味方に抱き込んだのです。

そこで四月の末に友蔵を呼び寄せて相談の上、お大にむかつてもいよいよ駈け落ちの相談を始めました。自分の育った甲府には、おふくろがまだ達者でいる。ひとまず其処へ身を隠そうと云うことにして、お大に二百両の金をぬすみ出させ、その一割の二十両だけをお大に持たせて、残りの百八十両は自分が預かりました。二人が一緒に出ては直ぐに覚られるから、おまえは一と足さきに出て、府中宿の友蔵の家に待ち合わせてくれ。私はあとから尋ねて行くと、うまく瞞だましてお大を出してやる。閨祭りの日には江戸や近在の参詣人が大勢集まって来るから、却っていいと云うので、五月五日にお大をこっそり落としてやりました。

お大は男にだまされて府中へ行き、友蔵の家で待ち合わせていたが、幾次郎は来ない。その翌日になつても姿を見せない。それも道理で、幾次郎は最初から一緒に駈け落ちをす

る気はない。女のふところには二十両の金を持たせてあるから、それを巻きあげた上でどうとも勝手に始末してくれと、友蔵に頼んである。実にひどい奴もあるものです。

それを知らずに持っているお大にむかつて、友蔵はいよいよ本性をあらわしましたが、自分に駈け落ちの弱味があるから、お大はじたばたすることも出来ない。ふところの二十両は早速にまきあげられて、その上に友蔵の慰み物です。逃げ出されては面倒だと思って、友蔵はお大を細引で縛って、用のない時は戸棚へ抛り込んで置く。お大は三十四、五ですが、容貌きりようもまんざらで無いので、さんざん玩具おもちゃにした上で何処かの田舎茶屋へでも売り飛ばそうという友蔵の下心したころ。お大はひどい目に逢いながらも、今に幾次郎が来るものと思つて、泣く泣く我慢していたと云いますから、よつぽどうまく男に瞞だまされていたものと見えます。

どう考えても幾次郎はひどい奴で、体ていよくお大を追い払って、百八十両の金を着服ちやくふくして、自分はなんにも知らない顔をして和泉屋に残っている。忠義者の親父に引きかえて、こいつはよくよくの悪者です」

「怖ろしい奴ですね」と、わたしは嘆息した。「そこで、一方のしん吉はどうしたんです」「こいつも亦ひどい奴で、幾次郎といい取組ですよ」と、老人もまた嘆息した。「伊豆屋

という酒屋の女房お八重は、前にも云う通り、大きい子供の三人もありながら、派手づくりで出歩くような女ですから、どうで碌な事はしてまいと思っていると、案のとおり落語家のしん吉に浮かれて方方で逢い引きをしている。それでも上手にやっていたと見えて、近所へは知られなかつたのですが、これも女が年上であるだけに熱度がだんだんに高くなる。いくらお人好しでも亭主がある以上、しん吉と思うように逢うことが出来ないのです。これも駈け落ちの相談、ちようど和泉屋の女房とおなじ行き方です。

この方は大抵お判りでしょうが、府中の方角へしん吉が稼ぎに廻っている時、かねて謀し合せてあるお八重は闇祭り見物ということにして、息子や番頭や若い者を連れて、大びらで家を出て行く。そうして、しん吉の泊まつている釜屋へ乗り込んで、祭りの暗まぎれに手を取つて道行^{みちゆき}、すべてが思い通りに運んで、その夜のうちに次の宿の日野まで落ち延びました。しん吉は世間の人に覺られないように、その日の午過ぎ^{ひる}に釜屋をいったん出立して、暗くなつてから又引つ返して来たのです。府中から日野まで一里二十七丁という事になつていますが、女の足弱をつれて夜道の旅だから撈取^{はかど}らない。八ツ（午前二時）過ぎにようよう日野の宿に行き着いて、寝ている宿屋を叩き起こして泊まりました。

きのうは昼も歩き、夜も歩き、その疲れで、お八重は日の高くなる頃に眼をさますと、

しん吉のすがたが見えない。お八重は家から百五十兩の金を持ち出して、それをしん吉に預けると、男はその金を持つて影をかくしてしまったのです」

「なるほど幾次郎とおなじような手ですね」

「そうです、そうです。さては置き去りを喰ったのかと、お八重も初めて気が付いたが、どうする事も出来ない。巾きんちやく着に残っている小遣い銭で、どうにか宿屋の払いをして出たが、今さら江戸へも帰られず、男にだまされたくやしさと、身の振り方に困った悲しさ

とで、いつそ死のうと思ひ詰めたのでしょう。それから二、三日は何処をうろついていたか知りませんが、その死骸が、調布の河原へ流れ着きました」

「身を投げたんですね」

「多摩川の深そうな所をさがして、身を投げたのでしょう。一方のしん吉はお八重を置き去りにして、又もや府中に引返して来て、吉野屋という女郎屋に隠れていた。と云うのは、その店のお鶴という女に熱くなっていたからです。お八重から巻き上げた金があり、惚れた女のそばに居て、しん吉はいい心持に浮かれています。お定まりの痴話喧嘩で、もう帰るとか何とか云って、雨の降るなかへ飛び出したのが因果、丁度わたくしの眼にかかつて、忽ち首根っこを押さえられました。やっぱり悪いことは出来ませんね。」

悪いことは出来ないと言えば、伊豆屋のお大といい、和泉屋のお八重といい、どっちも同じような不埒を働いて、同じようなひどい目に逢っている。しかもその場所が同じ府中の宿で、おなじ闇祭りの晩だと云うのも、何かの因縁がありそうで、不思議に思われない事もあります」

「そうすると、しん吉のおつかさんが夢を見た……しん吉が血だらけの顔をしていた夢を見たと言うのは、なんでもない事だったんですね」

「さあ、それに就いて少し不思議なことが無いでもありません」と、老人は考えながら云った。「今も申す通り、しん吉は死ぬどころか、平気で酒を飲んで浮かれていたのですが、お八重の顔が疵だらけになっていました。どこから身を投げたのか知りませんが、その後雨に水瀬が早くなって、お八重の死骸が流されて来る途中、川の砂利にでも擦られたのでしょうか。顔一面が疵だらけで、丁度しん吉のおふくろが夢に見たような姿でした。してみると、おふくろの夢もまんざら取り留めのない事でも無いようで、お八重の魂がしん吉の姿を仮りて現われたのかも知れません。それとも偶然の暗合とでも云うのでしょうか。そういうことは学者先生に伺わなければ判りません。もう一つの不思議は、例の友蔵が売り物にしていた荒鶉がその晩から見えなくなっていました。しかしこれは不思議がる

ほどの事でもなく、どさくさ紛れに綱を切つて、もとの明神の森へ飛んで行つたのかも知れません」

「関係者一同はどんな処分をうけました」

「今日の刑法では、誰も重い罪にはならない筈ですが、昔はみんな重罪です。まず伊豆屋の方から云いますと、お八重はもう死んでいますが、しん吉は死罪、しかしお仕置にならないうちに牢死しました。和泉屋の幾次郎は主人の女房と密通した上に、いろいろの悪事をたくらんだので獄門、女房のお大も死罪になりました。友蔵はほかにも悪い事をしているので、これも死罪。いくら江戸時代でも、これだけ一度に死罪を出すのはおわごと大事です。

和泉屋は前の清七の一件があり、又もや死罪が二人も出たので、女房の幽霊が出るの、手代の幽霊が出るのという評判、とうとう店を張り切れなくなつて、さすがの旧家もどこへか退転してしまいました。伊豆屋の方は無事に商売していましたが、これも維新後にごこへか立ち去つたようです」

云いかけて、老人は耳を傾けた。

「おや、雨の音が……。あしたの小金井行きはあぶのうござんすよ」

雨はあしたの日曜まで降りつづいて、わたしの小金井行きはどうもお流れになった。その翌年の五月なかばに、半七老人の去年の話を思い出して、晴れた日曜日の朝から小金井へ出てゆくと、堤どての桜はもう青葉になっていた。その帰り道に府中へまわると、町のはずれに鶉を売っている男を見た。かの友蔵もこんな男ではなかったろうかと思いつながら、立ち寄ってその値段を訊くと、男は素気そっけなく答えた。

「十五円……。お前さんはひやかしだろう」

いよいよ友蔵に似て来たので、わたしは早々に逃げ出した。

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（六）」光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年12月20日初版1刷発行

1997（平成9）年3月25日8刷発行

※この作品には、幡随院長兵衛の法事に関する記述がある。幡随院長兵衛の没年は1650年（1657年説もあり）。事件の起こった嘉永二年は、1849年であることから、「三百回忌の法事」は「二百回忌の法事」が相当と思われる。

入力：A.Morimine

校正：松永正敏

2001年2月13日公開

2011年2月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

二人女房

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>